

秋の風物に関する語源研究(その1)

宿 谷 良 夫

I

秋になると、夏のあの厳しい暑さに比べて、気温が急に下がってきて、空気が爽やかになり、身心共に充実してくるため、一般には、「読書の秋」とか「食欲の秋」とかいられているように、頭の巡りも胃の調子も非常によくなってくる。

日本の秋は暦の上では、立秋（8月8日頃）から立冬（11月7日頃）の前日までをさす。季語によると、8月を初秋、9月を仲秋、10月を晩秋として三秋と呼び、秋90日間を九秋といっている。しかし我々現代人の感覚からすると、8月はまだ夏の感じがする。従って実際の日常生活及び気象学上では、ひと月ずらして、9月、10月、11月の3ヶ月を秋としている。一方イギリスでは、秋は8月、9月、10月をさし、他方北アメリカでは、9月、10月、11月を秋としている。日本語の秋はもともとお祭りに関する言葉であって、昔は稲の刈り上げの祭の期間をさし、収穫の秋は農家にとって喜びの季節であった。

さて秋は四季のうちで最も快適な季節である。初秋のうちはまだ暑さも残っているが、日一日と大気も澄んできて、万物が爽やかになり、月や星を眺めるのに絶好の季節となる。万物が実り、やがて落ちてゆく。晩秋ともなると、自然も生物も冬への準備を始めるために、哀愁の感が一層深まってくる。従って秋はひとしお「ものゝあわれ」が感じられるのである。昔から秋は「もの思う季節」とされてきた。しかし誌歌において秋が悲しいものと一般化したのは、「古今集」以降であって、「万葉集」では、悲秋の感覚で読まれたものは少ないといわれ

ている。ところで10月の月平均気温は17.3℃で、5月の18.4℃とほぼ同じである。ともに爽やかな気温であるが、月間日照時間の平均値は5月が194時間に
対し、10月は134時間で、10月の方が暗い。その暗さが悲秋の背景にあるのかも
も知れない。従って秋は農民には収穫の喜びになったが、生産現場から離れた
官廷の文化人たちにとっては、秋は嘆きの対象であった。古歌では、

春はただ花のひとへに咲くばかりものあはれは秋ぞまされる よみ人しらず
（『拾遺集』）とうたわれている。清少納言は『枕草子』の中で、「秋は夕ぐ
れ」と述べたが、凋落の季節である秋と、凋落の時間である夕ぐれが重なって、
「秋の夕ぐれ」は一層「ものあはれ」が感じられる。和歌の世界から始ま
った「ものあはれ」は芭蕉にも引き継がれており、「ものさびしくあはれなる体、
秋の本意なり」（『至宝抄』）と彼は述べている。

秋あはれ山べに人のあと絶ゆる 室生犀星

秋は風の音でも感じられる。昔から

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬ 藤原敏行
（『古今集』の秋の部巻頭）とうたわれている。吹く風の音に秋の到来を感じ
取った歌である。秋風が身にしみると、秋の哀愁が身心共に一層感じられる。

秋を代表する言葉には、「月」と「紅葉」がある。日本では月見をすることが
風流であると同時に、昔から信仰的な意味があった。「十五夜」や「十三夜」
というように、満月となる月の出を待って物を捧げることで、人々は豊作や安
寧を願った。また「紅葉」は「秋の色」を表わす代表的な色である。現代では、
「秋の色」といえば、明るく爽やかな澄んだ空の色を思い浮かべるかも知れない。

更に秋は味覚の季節でもある。茸、栗、柿、秋刀魚、鮭、新米などが出てき
て、大いに食欲が増進してくる。

白鷺や今日こそ秋のことぶれに 林翔

II

「秋」の語源を調べてみると、日本語の「秋」は「大言海」によれば、「黄熟

の約^{やく}」としている。黄熟とは、果実が熟して黄色くなることを意味する。つまり「黄熟^{あかり}」を縮めて「秋^{あき}」としたのである。また新井白石は「百穀既に成りて、飽満^{あきま}るの義」といっている。つまり秋は実^みりの秋といわれるように、「いろいろの穀物が熟して食物が飽^あきるほど豊かになる」ところからきている。また『広辞苑』では、「秋空があきらか（清明）であるところからか。一説に収穫が飽^あき満^みちる意。また草木の葉の紅^{あか}くなる意からとも」と出ている。他にも「天地開明の開^あき」という説もある。『角川漢和辞典』によれば、「秋」は「とり入れるの意」の語源「収^あ」からきており、「禾（いね）を収^あ穫する意」から、ひいて「その時期の意」となったとしている。とにかく日本の初めの名を「豊^{とよ}あき^{つしま}津洲^{あきのみづほのくに}」とか「秋瑞穂国」というように、すべて秋は「多く穀物が豊かに実る」という意味に用いられている。

さて英語で秋は autumn 又は fall である。autumn の語源ははっきりしていないが、恐らくエトルリア語であるといわれている。一般に印欧民族では、最初一年を夏と冬とに二分し、ついで夏と冬との間に春を定めて一年を三分し、最後に秋を加えたといわれている。ところで古代ゲルマン人に関する最初の最もまとまった記述はタキトス Gaius Tacitus (55? - 120?) の *Germania* (『ゲルマーニア』) である。彼はローマ皇帝ネロの統治の始め頃にローマの名家に生まれ、いくつかの優れた歴史書を残しているが、この *Germania* は A. D. 98年前後に書かれた。この本の中で、「ゲルマン民族には春、夏、冬の名称はあるが、秋の名称も産物も知られていない」と述べられている。従って英語では、チャーサー Geoffrey Chaucer (1340-1400) が14世紀頃 (c 1374) Boethius の翻訳の中で、autumn という語を「秋」の意味で始めて用いたが、約2世紀ぐらいは一般には用いられなかった。(1) autumnの元の形は、古期フランス語 *autompne* で、ラテン語 *autumn-us* からきている。それでは英語本来の「秋」の意で用いられた語は何かというと *harvest* であった。この *hervest* という語が、現在の「収穫」の意味で用いられたのは、16世紀 (1526) のティンダル William Tindale (1492?

-1536) の聖書翻訳の中に始めて出てくる。彼は聖書翻訳を通じて、カヴァーデール Miles Coverdale (1488-1568) と共に、近代英語の成立に大いに貢献している。(2) harvest は古期英語では *hærfest* で、ラテン語 *carpere* (to pluck 「もぎ取る」の意) 及びギリシャ語の *karpós* (fruit 「収穫」の意) に由来する。ドイツ語の Herbst (秋、収穫) はこの harvest と同語源である。

次に fall という語は、「秋」の意味では、'fall of the leaf' (「落葉の季節」の意) に由来している。fall 一語にすべてを代表させる省略法の結果できあがった語であり、16世紀以来の用法である。イギリスの標準語では若干の成句以外には用いられず、現在アメリカ英語でよく用いられる。

英米の文学では秋の自然を描写したものが多し。特に詩の中では、感覚に訴える絵画的な色彩で表現されている。イェイツ William Butler Yeats (1865-1939) は 'The Falling of the Leaves' の中で、秋の木の葉の散る様子にたとえて、恋のはかなさを歌っている。天才詩人キーツ John Keats (1795-1821) は 'To Autumn' の中で、イギリスの秋の風景を絵画的に描き出している。この詩では、秋の豊かな実りの描写から始まり、秋が伝える自然の音楽や色彩が美しく表わされている。

III

日本では、秋は暦の上では立秋から始まる。今年(1956年)は8月8日(旧暦7月23日)がその日に当たる。立秋(英語では the first day of autumn になる)は二十四節気の一つで、大暑(7月23日)ののちの16日目に当たり、夏至(6月22日, summer solstice) と秋分(9月23日, autumnal equinox) のちょうど中間に当たる。日本の「気候」は、中国伝来の暦から、太陽の黄道上の位置を24等分して、24の季節を配したもので、二十四節気七十二候と呼ばれている。この言葉は「気」と「候」に発し、一年の季節の移り変りに目を向けた言葉で、旧暦の上に記された「太陽の季節」である。日付と季節が年によって大きくくずれる旧暦では、農事や生

物の季節は日付で表わすことができなかつた。一つの節気の長さは約15日間であり、候は約5日間である。それぞれの気を初候、二候、三候と3つの候に分けて暦は季節記事を書いている。気候学の出発点は、この「気」と「候」についての研究であった。季節や地域による気候の変化の根本原因は、太陽光線の傾きの違いである。英語で気候を *climate* , ドイツ語で *Klima* , その他ヨーロッパ各国語でも、ほぼ同じ発音の言葉であるのは、ギリシャ語 *Klinein* (*to slope* 「傾く」の意) に由来し、ギリシャ語 *Klima* (*region* 「地域」の意) の借入である。「春生夏長秋収冬蔵」の周期もまた光の傾きから生じた言葉であり、昔は「一米」を「ひととし」と読んだ。

立秋の雲の動きのなつかしき 高浜虚子

秋たつや川瀬にまじる風の音 飯田蛇笏

ところで立秋過ぎの暑さを残暑と呼ぶのは、立春(2月4日, the first day of spring) 後の寒さを余寒というのと似ており、ともに厳しいのが普通である。立秋の約半月後、8月24日から15日間が処暑で、残暑の厳さもこの日を境として暑さが^{おさま}処るという意味からきている。ところが実際にはまだかなり暑い日が続き、通俗に「暑さ寒さも彼岸まで」というように、立秋から彼岸頃(9月20日-26日)までの期間約1ヶ月半は、1年中で最高の温度と湿度を記録することがある。実際に昭和28年8月21日には最高気温38.4℃(東京)を記録した。紫外線は秋の方が強いので、日焼けもこの頃の方が激しいといわれる。ところで最高気温の平均値が30℃を割るのは、8月25日過ぎからである。ときどき暑さを中断するのは、雷雨や寒冷前線の南下や台風などである。いずれも8月後半に多くなる。

梢まで来て居る秋の暑さかな 支考

かまきりの虚空をにらむ残暑哉 北支

英語で残暑は *lingering summer heats* という。いつまでもぐずぐずうろついていて、なかなか立ち去りそうにもない夏の暑さをいうのである。しかし北アメリカは別だが、イギリスでは残暑に当たる1ヶ月半は、暑いのではなく

て、極めて穏やかな気持のよい暖かさが留まる季節である。

IV

日本では陰暦の7月は文月（ふみづき又はふづき）又は七夕月^{たなばたづき}と呼ばれ、陽暦の8月上旬から9月上旬の候に当たった。文月の語源を調べてみると、中国では古く7月7日に書物の虫干しをする習慣があって、これが日本にも伝わり、「文書^{ふみ}ひらく月」というていたものが省略されて文月と呼ばれたといわれている。

8月は英語では August である。古代ローマでは8月を Sextilis mensis（「第6番目の月」の意）と呼び、30日しかなかった。ところでジュリアス・シーザー^{ガイウス ニリクス カエサル} Gaius Julius Caesar (100 B. C.-44 B. C.) の姪の息子オクタヴィアヌス Gaius Julius Caesar Octavianus (63 B. C.-A. D. 14) は元老院から擁立された形で、Augustus^{アウグストゥス}（「尊厳なるもの」の意）の称号を贈られて皇帝の位に即き、Augustus Caesar (27 B. C.-A. D. 14) と呼ばれた。彼は9月生れであるが、8月が彼にとって戦勝その他幸運な月であったので、自分の称号を後世に残すために、8月を Augustus mensis に改めた。これが英語の August になった。さて Gallia^{ガリア} やローマ帝国の他の僻地^{へきち}では、古くから8月を「収穫」を意味する Eaust 又は aust と呼んでいた。明らかにこの類似がヒントになって変更を思いついたのであろう。しかしフランス人は August を採用せず、Gallia の古名をまず Aoust と変形し、現在 août で8月を表している。août は古くは8月に行われる「刈入れ」を意味した。

また古代ローマの暦では奇数月を31日、偶数月を30日とし、年末の月であった2月だけは平年29日であった。ところで古代ローマ人は奇数を吉の数と考えていたので、アウグストゥスは8月も2月から1日差し引いて31日と改めた。そのため混乱が起こり、今日のように毎月の日数がわかりにくくなった。しかし彼は皇帝となってからは内政の充実をはかり、平和と繁栄の基礎を築き、ローマ文化の黄金時代を現出した。

さて Julius Caesar は B. C. 46年にローマにユリウス暦 (Julian calendar) を制定し、B. C. 45年1月1日から実施した。これは1年を365日6時間として、4年毎にうるう年 (leap year) をおいた。しかしローマ教皇グレゴリウス13世 Gregorius XIII (在位1572- '85) (英名は ^{グレゴリー} Gregory) は、1582年10月に今までのユリウス暦を改訂してグレゴリオ暦 (Gregorian calendar) を制定した。これはユリウス暦を若干改めたもので、①西暦年数が4で割り切れる年をうるう年とし、②100の倍数の年には400で割り切れる年をうるう年とした。また③年初を3月25日の代りに1月1日とした。そこで前者を旧太陽暦つまり旧暦法 (Old Style) といい、後者を新太陽暦つまり新暦法 (New Style) という。イギリスは1751年まで不便な旧暦法を採用していたが、1752年に新暦法に切り換えて、大陸諸国と暦日を一致させた。日本でこれを用いたのは1872年 (明治5年) である。

ところで今日8月 (August) といえば、夏の暑さ (summer heat) と休暇の季節 (holiday season) とが連想される月である。古代の ^{アングロ} Anglo-^{サクソン} Saxon 人は8月を *Weōd-mōnāp* と呼んだ。*Weōd-mōnāp* とは「雑草の月」の意味であるが、古英語の *weōd* は、当時をもっと広義に「緑の草木」を意味していた。だから *Weōd-mōnāp* は「緑の草木の月」の意味であろう。その頃のイギリスでは、8月は ^{かし} 樅 (oak) や ^{ぶな} 樺 (beech) などの樹木がその緑の葉を伸ばす時期であったし、またそのことを人々が意識したからそう呼んだのであろう。また8月1日はイギリスの昔の収穫 (感謝) 祭日であり、^{ラマ} Lammas 又は Lammas Day という。Lammas は古期英語 *hlāmmaesse* 又は *hlāfmæsse* (loaf mass 「パンの祭日」の意) に由来する。イギリスでは Anglo-Saxon 人が、「もと新麦の粉で作ったパンを神に捧げて祝った初穂感謝の祭日」を Lammas (Day) と呼んだのである。この日はスコットランドでは四季支払い日の一つであり、カトリックでは聖ペテロ St. Peter の投獄とその奇跡的脱出 (新約聖書使徒行伝12: 4-10) を記念する日となっている。

9月になると上旬はなお厳しい残暑が続く、二百十日や二百二十日の台風シーズンである。ことに下旬は大型台風に見舞われることが多い。中旬から残暑も和らぎ、秋風の立つ日が多くなる。月見や彼岸が済むと、秋の七草が咲き、天高く、めっきり秋らしさが加わる。

日本では陰暦の8月は葉月はづき又は月見月つきみづきと呼ばれ、陽暦の9月上旬から10月上旬の候に当たる。葉月の語源を探ってみると、『奥義抄』には、この月は木々の葉がそろそろ落ちる頃なので「葉落月はおちつき」となり、それが訛なまって「はつき」になったとしている。また『類聚名物考』には、秋を知らせる雁かりが初めて渡ってくる月は、つまり「初来月はつきつき」であり、それが略されて「はつき」になったとしている。またこの月に入ると、田圃たんぼの稲の穂がみごとに張る月なので、「穂張り月」と称していたのが訛なまって「はづき」となったとしている。

9月は英語では September である。9月はラテン語 *Septem*（「第7」の意）に由来し、古代ローマの暦では文字通り7月をさした。それによれば、1年は10ヶ月で364日であった。B. C. 8世紀頃（c 713 B. C.）に Numa 王は December（最終月）の次に January と February を加えて1年を12ヶ月とし、355日とした。しかし B. C. 5世紀頃（c 451 B. C.）、1年の第1月を January、第2月を February と定めた。つまり年初に2ヶ月が加わったので、自然に他の月が2ヶ月分後に押しやられ、元の月名が示す数字と実際の月名に2ヶ月のずれが生まれた。この月順が今日まで用いられている。

さてイギリスで9月といえば、「収穫期」と「凋落期」とが意識される。古代 Anglo-Saxon 人は、この月を *Haerfast-mōnōp* (Harvest month「収穫の月」の意) 又は *Gerst-mōnōp* (Barley month「大麦の月」の意) と呼んだ。古英語の *Haerfast* は今日の英語の harvest と違い、もっぱら「穀物の収穫」、特に「大麦の収穫」を意味していたと考えられる。なぜならイギリス人は大麦を原料にして麦酒 *ale* (エール) を造り、昔から今日に至るまで愛飲しているからである。モーム William Somerset Maugham (1874-1965) の小説に

Cakes and Ale (『お菓子とビール』1930) という小説がある。この語句が idiom にも使われ、「人生の楽しみ」、「にぎやかな宴会」、「のんきな生活」という意味になっている。また「婚礼」を意味する *bridal* は古英語 *brȳd* (「花嫁」の意) と *ealo* (*ale*; *feast* 「祝宴」の意) からなる *brȳdealu* に由来し、「花嫁の家のビールの宴会」の意味である。つまりこのくらいイギリス人は *ale* を好んできたのである。

また彼らは9月を *Hālig-mōnāp* (Holy month 「神聖な月」の意) と呼んだ。彼らの祖先が異教徒で月を偶像崇拜していた頃、この月に生贄^{いげにえ}を捧げたためか、又はキリスト教の伝来以来、9月8日がキリストの聖母 ^{マリア} Mary の誕生日 (Birthday of Our Lady) に当たるから、そう呼んだのかははっきりしていない。

VI

二百十日は立春から数えて二百十日目のことで、新暦では9月1日に当たる。この頃季節の変わり目に当たる気象の変化のため、暴風雨がやってくることが多い。またその10日後の二百二十日も、新暦では9月11日に当たり、農家の厄日とされている。これは農作(稲作)と台風の間係を表わして注意を喚起するようにした我国だけの呼び方である。つまりこの頃は稲の開花期が大型台風の集中期に当たっているからである。昔から農村漁村では、「季の目盛り」として重要視されてきた。例えば、「二百十日の走り穂」は、この頃稲の穂が出始めることをいい表わし、「二百十日の別れ水」は、田の水を落とすことをいった。この「二百十日」という言葉が暦に現われたのは江戸中期の頃で、暦学者として有名な安井算哲(1715年没)が、老漁夫から教えられて幕府に進言し、この日を厄日として自分の編纂した貞享暦(1685)に始めて「二百十日」を書き入れたといわれている。

台風は気象学では、熱帯(性)低気圧が風速毎秒17mになったら台風と呼ぶ。この台風のことを古くは颱風^{タイフーン}と書いていた。明治時代に英語の typhoon に音韻

を合わせて、「颱風」と書くようになり、その後昭和21年(1946)に当用漢字が制定されてから台風となった。中国では台風のことを「颶風ぐふう」とも書くが、颶は「あらゆる」の意の具と風とを組み合わせた文字で、「すべての方向から吹く風」という意味である。さて日本で颱という字が最初に使われたのは、曲亭馬琴の「椿説弓張月ちんぜいゆみはりづき」の中である。ところで台風は北太平洋の熱帯地方及び東シナ海に発生したものをいう。台風という言葉ができるまでは、秋の大風のことを「野分」(「のわき」又は「のわけ」と呼んできた。この野分は、『源氏物語』(11世紀初期頃)の「野分」の巻の中でも、同時期の『枕草子』の中でもみられるように、既に平安初期には今と同じ意味に使われていた。野分の語源は、一般には「野の草木を吹き分ける風」の意とされている。野分の吹く時期は、『平家物語』(13世紀)や『徒然草』(14世紀)にあるように、秋から冬にかけての時期である。

鳥羽殿へ五六騎急ぐ野分かな 蕪村

さて台風は英語では typhoon である。この語はアラビア語 *tūfān* (deluge 「大洪水、豪雨」の意) 又はギリシャ語 *tūphōn* (whirl wind 「施風、つむじ風」の意) に由来している。アラブ人はヨーロッパ人より以前に、アジアの南東の地域を探検していたのである。*tūfān* は *tūphōn* に由来、又は両者は共通の語源に由来している。ギリシャ神話に出てくるテュフォン *Typhon* は、この *tūphōn* に由来し、テュフォエウス *Typhoeus* の子であるか又はそれと同一視された。この怪物は百個のヘビの頭を持つ邪悪な巨人であって、Zeus はその害悪を知り、彼に落雷を落して火を放ち、Etona 山の下の地下界 Tartarus に埋めたという。また彼は地球の地震の原因であると考えられている。チフス *typhus* もギリシャ語 *tūphos* (fever; delusion 「熱」又は「錯覚」の意) に由来して、*Typhon* と同語源である。このように typhoon は昔から悪魔のようにみられていた。

VII

稲は東南アジアの原産で、栽培は中国古代に始まるといわれている。日本では縄文時代頃から稲の栽培が行われ、8世紀奈良時代の末期になって重要視されるようになった。

「稲」の語源は、「命の根」とか「飯根^{いひね}」の訛りからきたといわれるがはっきりしていない。漢字の「稻」は「稻^{うす}」で、「臼^{うす}の中でこねる」の意であり、臼でついで餅状にならすことのできる穀物をいう。「米」の語源は、「小さい実」、つまり「小実^{こみ}」が「コメ」になったとか、「柔実^{にこみ}」が「コメ」になったとかいわれている。また古くは米はオソシネ、ウルシネというように、「シネ」と呼ばれていた。シネは「死ね」に通じるために「ヨネ」ともいった。これは「吉^{ヨシ}」のヨ、「種子^{タネ}」のネからきたといわれる。「飯^{めし}」の語源については、「召^めし上^あがる」「食物^{めし}」「美食^{めし}」などが略されたり、訛ったりしたものといわれる。「飯^{めし}」は実は尊敬語からきた言葉である。また「強飯^{こわめし}」といって米^むを蒸^むして食^{めし}べたことから、「ムシ」が訛ったという説もある。「大言海^{きこしめしもの}」では、「聞食物^{めし}」の略とある。「何によらず、身に受け納めるをめす^{めす}という。飯^{めし}はその第一であり、人を尊んでいったのによる」とある。

ゆふぐれの溝をつたへり稲の香は 平畑静塔

英語では「稲」,「米」を rice という。アジアでは2000B. C.頃から栽培され、アレキサンダー大王がB. C. 4世紀に Babylonia を征服した際に、Tigris, Euphrates 川沿岸に植えられていたという。riceの語源は古代インド語 *vrihi* に関係あるらしいが不詳。一応、ギリシャ語 *oruzon, oruza* から後期ラテン語 *oryza* に由来するらしい。日本語の古語「ウルチ」はこの *vrihi* に由来するらしいがはっきりしていない。鈴木梅太郎博士(1872-1943)は米^{ぬか}の糠からビタミンB₁をとったので、その物質をこの語源から *oryzanin* と名づけた。

英米では結婚式が済んで、新婚旅行に出かける夫婦にその門出を祝って、頭上に米を投げつける習慣がある。この風習は rice を多産 (fecundity) の象徴としたインドからの伝習又は古代ローマの遺習だといわれている。

VIII

「いなづま」は空中で電気が放電するときに閃く^{ひらめ}火花、つまり電光のことで、「いなびかり」（稲光）ともいっている。雷鳴を伴い、あの夕立のときに多い。「いなづま」は漢字で「稲妻」と書いているが、もともと「稲夫」が本当である。電光の古い異名は「稲の殿」という。秋になって稲が実を結ぶのは、オシベの花粉がメシベにつくためであるが、すべて物事が科学的に説明されなかった古代では、「稲は実をはらむから女性だ」と単純に考えていた。そのうち電光の多い年は稲の実りが良好で豊作になることを知り、これはきっと男性の電光が毎夜のように稲に通うため穂がはらむのだと信じるようになり、このことから電光のことを稲夫というようになったといわれる。

ところで「いなづま」の多い年が豊作なのは、雷雨の多い年は、一般に多照高温の豊作型気象を伴い、雷の放電によって空気中の酸素と窒素とが結合し、さらにこれが雨に溶けて窒素肥料が多くできるためといわれる。雷雲の中で、正と負の電気が別々のところに蓄積されて、電位差が非常に大きくなると、空気の絶縁が破れて火花放電が起こる。これが稲妻であり、人の目には、一回のピカピカに見える電光だが、実際には、同じ「放電路」を電気が百分の四秒ほどの間隔をおいて何回も往復しているのである。

稲妻や顔のところが薄の穂　芭蕉

空遠く走る山脈いなびかり　岩佐清子

稲妻は英語では lightning という。lightening（光る、輝く）の変形で、13世紀頃（ \approx 1280）から lightninge として使われ始めた。

IX

真夏の空に入道雲が沸き上がると、やがて稲妻が走り雷鳴がとどろき出す。夏にはつきものの雷であるが、昔の人々もたいへん恐ろしかったようである。「広辞苑」では、雷は「神鳴^{かみなり}の意」とあるので、昔の人はあの雷の音を天の怒りの音と思ったのであろう。昔は雷を「いかづち」ともいい、『古事記』にも

出てくる。この語源は『大言海』では、「^{いかつち}嚴之靈の意」で、「^{おそ}ひどく畏ろしい神だとしている」とある。「^ち靈」は「神」を意味するから、雷は「^{いか}厳めしい神」、つまり恐ろしい神とみられていた。

雷が鳴ったら、^{くわばら}「桑原、桑原」と人々が唱えたわけは、菅原道真が火雷天神と思われていたからであり、その怨霊封じのおまじないであった。桑原は道真の領地で、菅公復官贈位のあと、一度も落雷しなかったという故事に^{ちな}因む。彼は藤原氏の^{ざん}讒言で^{だざいごんのそち}大宰権師に左遷されて、榎寺で亡くなった。死後怨霊となり、雷を落して祟りをなしたといわれる。彼は紅梅をこよなく愛したので、それと別れを告げる和歌が有名である。

^{とち}東風吹かば 匂いおこせよ梅の花 ^{あるじ} 主なしとて 春な忘れそ

雷の音ひと夜遠くを渡りをり 中村草多男

雷は英語では *thunder* である。この語源はサンスクリット語 *tanyati* (*it sounds* 「響く」の意) に由来し、ゲルマン語 *ponaraz* (古代スカンジナビア語 *pōrr*) から古英語 *þunor* になった。-d- は13世紀半ば頃添加された。*pōrr* は Thor で、北欧神話に出てくるトールのことである。彼は主神 Woden の長男の雷神で、神人中最も強力で勇敢な男神であった。人間の住む世界、地上界の守護者であり、雷、天候、豊穡の支配者であった。英語の Thursday (木曜日) は古代北欧語 *þōrsdag-r* の借入語で、後期古英語 *þōrsdæg* になった。つまり Thor's day で、トールの日の意である。Thursday の s は所者格を示す 's である。

X

夕立は夏の、多くは夕方に、雷を伴って短い時間に激しく降る雨のことである。夕立や雷雨は驟雨^{しゅうう}(にわか雨)の典型である。急に曇ってきて大粒の雨が落ち、ときには雷鳴が聞こえ、激しい雨になるが短時間で止んでしまう。あとはけろりと晴れてまた蝉の声が聞こえたりする。夕立の降る区域は積乱雲の通路に当たる狭い帯状で、「夕立は馬の背を分ける」といわれる。炎天後の夕立

は人も草も生き返る爽やかさがある。

夕立の語源は、『大言海』には、「夕立雨の略」であって、「^{ゆうたちのあめ}ゆうだつこと」、つまり「^{ゆうがた}夕方^{はじ}の暗いようになり初める」ことで、「夕方とは限らない」とある。『国語語源辞典』では、「雷（かみなり、いかづち）のことをかんだちという方言がある。この^{だち}だちという語は、^{づち}づちと同類で、竜蛇神、転じて雷神を意味する語にも関連する語らしい。夕立とは夕立近くに降る雷雨が本義で、雷（だち、づち）を伴う雨の義。転じて、雷をともなわなくても、急雨の意になった」としている。

夕だちや草葉を^{つか}摺むむら雀 蕪村

石ぬれてやすらふ色や夕立後 尾崎光尋

夕立は英語では shower である。中世英語やノルマン語やゴート語では「一陣の風」を意味し、特に印欧語及びラテン語ではそれぞれ north wind（北風）、northwest wind（北西風）を意味した。shower は雨に限らず、元来^{ひょう}みぞれや雹や雪の予期せぬ一降りをさした。アメリカでは結婚式のときに贈物が^{ひょう}だぶらないように、贈物を割り当てて頂だいする結婚祝い贈呈会をいう。

XI

二十四節気では、9月8日から22日までの15日間を^{はくろ}白露という。白露は「しらつゆ」つまり「露が固まって白い」の意味である。『大言海』では、露とは「しる、水気、^{しめ}湿りをいう。あるいは粒齋の意で、円くて^{きよ}淨いのをいう」とある。他では、「透明の意。転じて透明にすけてみえること」とか「しきつらねるの意」とかある。『角川漢和辞典』では、「つぶつぶがつらなる意。水蒸気のつぶになったものをいい、またうるおすことを意味する」とある。

白露のころになると、秋気も本格的に加わり、朝日に光る露に秋をひとしお感じる季節となる。「朝方露のあるときは晴、ないときは曇り」とか「草木に露が多いときは近いうちに雨」と正反対の諺がある。「月の^{しづく}掣」は露の異称である。パキスタンでは露は「月の妹」にたとえられる。露は晴れた夜の冷え込

みでよく降^さりるので、月と結びつきやすい。一日の最高気温と最低気温の差の平均値は、9月が6.8℃、10月が7.3℃、11月が8.2℃、12月が8.8℃と冬に向かって大きくなる。夜が長くなる上に、晴天が多くなり、夜間の放射冷却が強まるからである。この露の量は雨量換算で、年間10ミリ程度と推定されている。露は日が当たると消えるので、「露の世」、「露の身」、「露の命」、「人生は朝露のごとし」などとはかないものたたとえにもなっている。

芋の露連山影を正しうす 飯田蛇笏

しらつゆやすゝきにからむ葛かずら 西島表南

露は英語では dew である。dew はギリシャ語 *thein* (to run「流れる、こぼれる」の意) から、ゲルマン語を経て、古英語 *dēaw* に由来する。dew は、the dew of one's youth (さわやかな青年時代) (旧約聖書の詩篇 110 : 3) のように、朝や青春などの新鮮味、さわやかさを表わして比喩的に使うことがある。「露」は詩の材料にも使われることが多い。

ブライアント William Cullen Bryant (1794-1878) (アメリカの詩人) の 'To the Finged Gentian' (「リンドウに寄せて」) では、次のように歌っている。

Thou blossom, bright with autumn dew, (秋の露に輝く花よ
And colored with the heaven's own blue, … その色は天の青そのものだ)

ローレンス David Herbert Lawrence (1885-1930) (イギリスの小詩家、詩人) の 'Song-day in Autumn' (「秋における歌の祭日」) では

When the autumn roses	(秋のバラが
Are heavy with dew, ……	露で重いと
When the autumn roses	秋のバラが
Trickles the dew,	露をこぼすとき
When the blue mist uncloses	青い霧が姿を現わし
And the sun looks through,	太陽がのぞくとき
You from those startled hills	きみは驚いた山々から

Come away,……

出てゆく…)

と歌われている。

XII

9月の花は朝顔である。朝露を含んで咲いている朝顔は、ひとときはかない生命を象徴している色彩豊かな草花である。「朝顔」の名は、『大言海』には、「朝かおほなの容花の意」とあり、朝に美しい花を咲かせるところからつけられた。この花は熱帯アジア産だといわれる。中国では千五百年前から種子を薬用に使っていた。中国から日本に伝来したのは平安時代といわれ、種子を下剤として薬用に使っていた。鑑賞用では江戸時代以後といわれる。『万葉集』に出てくる朝顔あきようは桔梗のことである。朝早く朝顔の開花する時期に爽やかな風が始まる。朝顔と同じヒルガオ科の草花ひるがお よるがおに昼顔と夜顔があるが、名前の通り、それぞれ昼と夜に美しい花を咲かせる。夕方になると涼しげに咲く草花に夕顔ゆうがおがある。これはウリ科の一年草で、美しい花であると共に食用になる。すし用のカンピョウはこの夕顔の実から作られる。

朝顔に釣瓶とられて貰い水 千代女

朝顔や夢の浮橋かけ渡し 北枝

朝顔は英語では morning-glory という。「朝の輝き、美観」とは美しい言葉である。朝顔の日本の花ことばは、「約束」、「はかない恋」、「私はあなたに結びつく」である。英語の花ことば (floral language) では、affection (愛情、気取り、装い)、equanimity (平静) となる。

XIII

秋の野に 咲きたる花を および 指折り

かきかぞふれば くさ 七種の花

はぎの花 尾花葛花 なでしこの花

おみなへし また藤袴 あさがおの花 山上憶良 (『万葉集』)

これは『万葉集』に出てくる「秋の七草」(the seven autumn flowers)を詠んだ歌である。最後の朝顔は桔梗のことだといわれている。

萩は秋の七草の一つだが木である。ただ木の仲間にはない優しさが捨て難い。その可憐な花が愛されている。萩の語源は、『大言海』では、「萩」は「萩芽子」とあって、「生芽はえきの意。宿根より芽を出すから、芽子の字を用いる」とある。「萩」という字は中国の漢字ではなく、「𦵏」(草かんむり)に「秋」を組み合わせて日本で造られた字である。俗語源説的に当てた単なる当て字にすぎない。日本の花暦では彼岸花とともに9月の花として選ばれている。若葉を摘んで乾燥させ渋茶代りにする。

三日月やこの頃萩の咲きこぼれ 河東碧梧桐

萩の客去りたるあとの月夜かな 大場白水郎

英語では萩属の植物をbush clover(「やぶのクローバー」の意),又は lespedeza [ləspɛdɪ:zə]という。lespedeza は、18世紀 Florida 州のスペイン総督 V. M. de Zespedez の Z を L と誤読したことからできた語である。

秋になると野山はススキ(芒)の穂におおわれる。「芒」の語源ははっきりしないが、『大言海』では、「すすく生えているところから名づけられた」ようである。ススキの花が動物の尾に似ているところから、文学的には「尾花」と呼ばれている。白い花穂である。一方ススキは、その茎から屋根をふく材料としても重用されてきたので、カヤ(萱, 茅)と呼んでいる。この語源は上屋かやからきており、昔は屋根をふく草はすべてカヤと呼んでいたが、いつのまにかススキだけをさすようになった。従ってススキは青葉のときはススキ、花穂のときはオバナ、枯れたときはカヤと呼ばれる。ススキは「芒、薄」と書かれ、風に揺れる姿に趣きがある。十五夜の月見に、お団子とともにススキを供える風習は江戸時代に始まったものである。「船頭小唄」(野口雨情作詞, 中山晋平作曲, 大正10年)の中に出てくるあの枯れススキは、今でも我々の胸に訴える力強さがある。すすきの花言葉は「活力」である。

山は暮れて野は黄昏の薄哉 蕪村

幽霊の正体見たり枯尾花 横井也有

ススキは英語では eulalia である。ギリシャ語 *eulalos* からの借入語である。eu (well, good 「良い」の意) と *lalós* (talkative 「おしゃべりな」の意) が組み合わさったことばで, sweetly speaking (よくおしゃべりすること) の意である。

葛の花の誌歌には^{しのぶ}釈迢空(折口信夫)の歌集『海やまのあひだ』(大正13年)の巻頭の一首がある。

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。

この山道を 行きし人あり

葛に逢ふたのしきに来し峠かな 有働木母寺

葛の葉に風かけ登りかけくedar 鎌田露山

「葛」は、『大言海』には、「^{かずら}くず葛というのが正しい」とある。中国名は「^{かつ}葛」だが、これをクズと読むようになったのは、昔大和吉野川^{ほとり}の畔の国栖^{くず}地方の人が、このカズラの根の粉を売り歩いたので、その原料植物をクズとしたという。今でも和菓子の材料には「吉野葛」が欠かせない。またこの根を^{まど}刻んだものを他の^{しょうやく}生薬と合せたものが葛根湯である。「くず湯」は、根からとった澱粉を熱湯で^と溶いたものだが、これを冷水で薄めた「くず水」は、のどの渴きをよくとめる。盛夏には健康的な飲み物である。

^{くず}葛は英語では arrowroot である。「矢の根。矢の根を抜く」とは、「インディアンがその根を毒矢の傷の治療に用いたことから」に由来する。

「^{なでしこ}撫子」は、『大言海』には、「この草の花や形が小さく、色も愛すべきものだから、愛児に擬し、^なナデシコという」とある。つまり撫^なでてやりたくなるようなかわいらしい、可憐な花だから「^{なでしこ}撫子」といわれる。普通^{なでしこ}ナデシコという^{とこなつ}とピンク色のカワラナデシコをさす。セキチクともいわれ、もと中国産で、古く日本に渡り、広く栽培されている。「常夏の花」と呼ばれるように、初夏にみられる花が晩秋まで咲き続ける。日本女性の美称を「^{なでしこ}大和撫子」といっている。大正の世に現われた唱歌のうち、今もしきりにコーラスで歌われる「故郷

を離るる歌」(吉丸一昌作詞、ドイツ民謡)の中に、「庭の小百合撫子」とこの花が出てくる。哀感を覚え、胸を打つ歌である。撫子の花詞は「純愛」、「才能」、「無邪気」である。

撫子やそのかしこきに美しき 惟然

撫子や夏野の露のおとし種 雄彦

撫子は英語では gillyflower 又は (fringed) pink という。gillyflower は、ギリシャ語 *karuóphullon* (clove tree 「丁子の木」の意) に由来し、これは *káruon* (nut 「木の実」の意) と *phúllon* (leaf 「葉」の意) とが組み合わさってできた語である。それから中世ラテン語 *caryophyllum* を経て、中世英語 *gilofre* が変形した語である。今の形は flower との連想からできた語である。fringed pink では、まず fringed は、「房のついた」とか「花卉のへりなどがぎざぎざに裂けた」という意味である。pink は、オランダ語 *pinck oogen* (small eyes 「小さな目」の意) に由来する。

オミナエシは、『大言海』では、「花の色が美女をも^{えん}壓す意か」とある。「壓」は「圧」で、「あつする」である。オミナエシのオミナは「若い女」の意で、エシ(ヘシ)は、メシ(飯)からの転訛したもので、粟飯から想像されたものらしい。黄色い花がオミナエシ(女郎花)で、白い花がオトコエシ(男郎花)である。女郎花は美しいというより、その姿と^{ふぜい}風情を愛する花で、姿が女性的なので、日本文学でも多く女性に見たてられている。しかし花の液は悪臭がある。女郎花には次のような話がある。昔、^{おののよりかぜ}小野頼風の愛人が、彼に捨てられたことをはかなみ、川に身投げした。その衣の朽ちた後に咲いた花が女郎花といわれ、謡曲「女郎花」はこの話しを取り入れたものである。女郎花の花詞は「美人」、「はかなき恋」である。

秋風を待つとて立つや女郎花 成美

女郎花少しはなれて男郎花 星野立子

ふるさとの野の女郎花男郎花 佐藤深人

藤袴は花の色が藤色で香りがよく、邪気を払うために身につけた習慣があっ

たことからこの名がついたという。香りがよいことから香水蘭ともいい、中国では浴剤に使った。藤袴の花詞は「ためらい」である。

藤袴この夕ぐれのしめりかな 園女

藤袴吾亦紅など名にめでて 高浜虚子

藤袴は英語では boneset 又は thoroughwort 又は eupatorium 又は agueweed という。以前薬用として用いられた。まず boneset は、「骨接ぎ」の意、つまり、「茎が葉を貫いているように見える、つき抜き(perfoliate)」という意味であって、草の形をこのように表現したものである。次の thoroughwort も全く同じ意味で、thorough は古くは、「貫く、貫通する」意で、wort は「草」の意である。次の eupatorium は、*Eupátōr* (120? -63 B. C.) という Pontus の王が、この草を薬用として最初に用いたことに由来する。この語は藤袴などキク科ヒヨドリバナ属数種の総称である。最後の agueweed は、ague が「おこり、つまり熱、寒け」の意で、weed は「草」の意である。「熱を下げる薬用」のことをいったものだろう。

「桔梗」はまだ秋の気配もない頃に咲き始めるので、この花が咲くと早い秋を感じる。実際には6月の終り頃から咲き始めるので、夏草といってもいっこうおかしくない。この花は清澄な空気を感じさせる。根は祛痰剤になる。桔梗の花詞は「気品」、「変わらぬ愛」である。

山霧にぬれて色濃き桔梗かな 村上鬼城

朝露をはかりこほせし桔梗かな 露川

桔梗は英語では balloonflower 又は (Chinese) bellflower という。

balloonflower は「風船花」の意であり、bellflower は「釣鐘花」の意である。いずれも花の形を表現したものと思われる。

「吾亦紅」の桑の実にも似た暗紫色の小花は、集合してツクシ状の穂をつくる。秋草の中でも一番佳しく、地味な花である。ワレモコウの名は、この葉に切れ込みがあって、茎葉にはのかな香気があるからである。「大言海」にも、この草のことを「和木香の意」としている。和名は吾木香、吾亦紅である。漢

名を地榆といい、これは葉がニレの葉に似ているからである。花は上の方から順々に開いてゆき、根を薬用にする。ワレモコウの花詞は「愛慕」、「変化」である。

しゃんとして千草の中の吾亦紅 路通

路岐^{わか}れして何れか是^{いづ}なるわれもこう 漱石

ワレモコウは英語では burnet である。burnet は古期フランス語 *brun* (brown「褐色、茶色」の意)の指小辞 *brunete, burnete* に由来する。英語の *brunet* (黒みがあった) は同系語である。

XIV

春分、秋分の日の前後の7日間を彼岸と呼び、春の彼岸は新暦3月18日頃に入り、24日頃まで、秋の彼岸は新暦9月20日頃から26日頃までをいう。彼岸入りから4日目を彼岸の中日(春分の日、秋分の日)という。この日先祖の霊を供養し、墓参りなどが行われるが、彼岸の本来は7日間に行われる法会、彼岸会のことである。この頃になると、「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉通りに、暑さも峠^{しの やす}を越して、凌ぎ易くなる。彼岸の名称は、仏典の到彼岸^{とうひがん}からきており、現実の生死の世界から煩惱^{げだつ}を解脱し、理想の涅槃^{ねはん}の世界へ至るという意味である。

秋分の日には昼夜の時間がほぼ等しくなり、それから次第に夜の方が長くなる。しかし昼夜のほとんど等しくなるのは、日本では秋分から3日後である。いかにも秋の感じの深い「夜長」はここを境として始まる。

秋分や日の入り拝む桑畑 青淵

秋彼岸地上の者に香煙る 秋沢 猛

彼岸は英語では the equinoctial week といい、彼岸の中日、即ち秋分の日には、the autumn(al) equinox という。equinox は(古期)フランス語 *equinoxe* 又は中世ラテン語 *aquinox-ium* に由来する。equinox は、*equi* (equal「等しい」の意)と *nox* (night「夜」の意)が組み合わさった語で

あり、equal night つまり「夜の長さが昼の長さと同じ」ときをさす。「暑さ寒さも彼岸まで」は、Neither heat or cold lasts beyond the equinox. である。

XV

西洋占星術 (astrology, 一回の星占いは horoscope) によると、9月23日から10月23日までの間に生まれた人の星座が「天秤座」(Libra)である。「天秤座」は、初夏の頃の夕方、南の空に出る星座で、乙女座と^{さそり}蠍座のはば中間に見える星座であるが、皆3等星以下である。この星座を代表する星は、四角形を形作る四つの星で、2つずつが両方の天秤に当たる。

古代ギリシャ人は、この星座を蠍座のはさみと見ており、今でも^{アルファ}α星を「南の爪」、^{ベータ}β星を「北の爪」と呼んでいる。天秤座となったのはB. C. 1世紀頃といわれ、秋分点が当時この星座の中にあつたため、昼夜の長さが等しくなることを天秤で表わしたとみられる。この天秤は、乙女座の正義の女神アストラエア (Astraea) が、人の運命を決定し、正邪善悪をはかる天秤であると考えられた。当時のローマの詩人ヴェルギリウス Publius Vergilius Maro (70-19 B. C.) (英名 Vergil) は、「この星座が^{たね}種まきの時期を示すために、農民に重要視された」と述べている。この星座生れの人には、水平に保たれた天秤のように、公平な批判力を持ち合わせ、冷静で調和を尊ぶ精神を兼ね備えているといわれる。天秤座の人の運勢に関係あるものは、花ではアジサイ、色では緑と淡青が最上である。宝石では不運の石がルビーで、幸運をもたらす石はオパールである。

古代ローマの重量を表わす単位は libra であった。そのため英語で重量の pound を表わす場合、lb. 又は L, £ と省略するのはここからきている。libra はラテン語 *libra* の借入で、中世英語に入った。pound (重量、通貨ポンド), *balance* (天秤), *level* (高さ) を意味した。litre 又は liter はギリシャ語 *litra* (pound) の借入で、後期ラテン語 *litra* を経て、フランス語 *litre*

に由来する。容量の単位はリットルで、略してl, 又は lit. とする。

XI

秋分以後次第に夜が長くなってゆく。「秋の夜長」は、英語ではlong nights of autumn になろう。統計によると、10月中旬の晴れた日は、午後3時の平均気温が22℃、湿度は46%で、秋の爽やかさが気象観測値でも裏付けられている。日は午後5時頃沈み、午後6時には気温が18.4℃に下がる。同じような「爽やかな気温」は5月中旬の晴天にも現われ、午後3時の平均気温は22.4℃湿度は49%である。しかし午後6時になっても日は沈まず、気温は19.9℃で、新緑の道はまだ明るい。日中は同じ気温でも、夕方の感じは5月と10月では全然違うのである。そこで春は「日永」、夏は「短夜」、秋は「夜長」、冬は「短日」とするのは理屈に合わない。最も日の長いのは夏至であり、最も夜の長いのは冬至であるからだが、秋が深まるにつれて、夜の長さを感じるというのは、気分的に生活の実感としてそう受け止めているから、感性上極めて適切なことである。夏の暑さと明るい短い夜で落ち着かなかった人々も、日毎に長くなる夜に、ようやくしみじみとしたものを感じる。「灯火親しむべし」と書物をとってみたいくなる。読書が楽しめるのは「秋の夜長」である。

つくづくと古行燈の夜長かな 内藤鳴雪

長き夜の物書く音に更けにける 村上鬼城

以上、「秋の風物に関する語源」について、日本語の語源と英語の語源とを俳句を交えながら、あまり無味乾燥にならぬように、考察してみた。事項がたくさんあるため、足りない分を次回に回したい。

註

- (1) O. E. D. によれば, Chaucer が autumn を「秋」の意で用いた *Boeth. iv. vii. 144* (c 1374) の翻訳の中で次のように出ている。

Autumpne comeþ azeyne heuy of apples.

次に, Tindale の *Fude 8.* (1526) には,

Trees rotten in authum. とある。

- (2) O.E.D. では, harvest が「収穫」(The reaping and gathering in of the ripened grain; the gathering in of other products) 又は「収穫されたもの」(The ripened grain or fruit; the corn-crop) の意味で, Tindale がマタイ伝の翻訳の中で次のように使っている。 *Matt. ix. 37.* (1526)

The *harvest* is greate but the laborers ar feawe.

〔参考文献〕

- 『研究社新英和大辞典第5版』 小稲義男編代表 研究社 1980刊
- 『研究社新和英大辞典第4版』 増田綱編 研究社 1974刊
- The Oxford Dictionary of English Etymology*
Ed. C. T. Onions Oxford 1966刊
- 『英語語源小辞典』 中島丈雄他編 研究社 1970. 11. 刊
- 『コンサイス外来語辞典』 三省堂編 三省堂 1972. 5. 刊
- 『英米古事伝説辞典増補版』 井上義昌編 富山房 1972. 11. 刊
- 『英米風物資料辞典』 井上義昌編 開拓社 1971. 11. 刊
- 『英米文字植物民俗誌』 加藤憲市著 富山房 1976. 4. 刊
- 『イメージ・シンボル事典』

アト・ド・フリース著 山下主一郎主幹 荒このみ他共訳

- 大修館書店 1984. 3. 刊
- 『英語固有名詞エピソード辞典』 松永泰典著 木魂社 1983. 12. 刊
- 『新編 大言海』 大槻文彦著 富山房 1982. 2. 刊
- 『広辞苑』 新村出編 岩波書店 1955. 5. 刊
- 『角川漢和中辞典』 貝塚茂樹他編 角川書店 1959. 4. 刊
- 『国語語源辞典』 山中襄太著 校倉書房 1976. 7. 刊
- 『漢字語源辞典』 藤堂明保編代表 学燈社 1965. 9. 刊
- 『英語歳時記(秋)』 成田成寿編 研究社 1968. 12. 刊
- 『英米文字カレンダー』 所勇著 英宝社 1969. 8. 刊
- 『英文学が語る十二ヶ月一季節のことば』
荒木源博著 研究社 1976. 6. 刊
- 『英米の年中行事』 東浦義雄・板倉恵美子共著 研究社 1963. 5. 刊
- 『英単語の歴史』

アイザック・アシモフ著 岩田一男訳

共立出版株式会社 1970. 10. 刊

○『科学の語源 250』

アイザック・アシモフ著 小尾信弥監修 東洋恵訳

共立出版株式会社 1972. 5.刊

○『英単語物語』 小川芳男・前田健三著 有精社 1982. 7.刊

○『西洋語源落書帖』 相馬隆著 時事通信社 1987. 8.刊

○『ことばのロマンス (英語の語源)』

ウィークリー著 寺沢芳雄・出淵博共訳 岩波書店 1987. 7.刊

○『英語発達小史』 H・ブラッドリ著 寺沢芳雄訳 岩波書店 1982. 5.刊

○『神話の世界』 野町二著 研究社 1959. 12.刊

○『星座の神話』 原惠著 恒星社厚生閣 1975. 1.刊

○『立体イギリス文学 (イギリス文学案内)』

野町二・荒井良雄共著 朝日出版社 1968. 10.刊

○『ことばの豆辞典第1—5集』 三井銀行編集室 角川書店

1983. 10. ~84. 5.刊

○『昭和六十二年神宮宝暦』 鹿島秀峰編著 神宮館 1986. 7.刊

○『カラー図説日本大歳時記(秋)』 水原秋櫻子監修 講談社 1981. 10.刊

○『俳句歳時記 (秋の部)』 富安風生編 平凡社 1959. 9.刊

○『新撰俳句歳時記 (秋)』 平畑静塔編 明治書院 1976. 8.刊

○『写真俳句歳時記 (秋)』 横田正知編 社会思想社 1963. 9.刊

○『花ことばファンタジー』 中村俊十著 保育社 1987. 4.刊

○『カラー歳時記 `草花`』 松田修著 保育社 1968. 3.刊

○『季節の散歩道』 飴山實著 木阿弥書店 1987. 8.刊

○『季節のことば』 井本農一著 小学館 1987. 7.刊

○『花ごよみ』 杉本秀太郎著 平凡社 1987. 6.刊